

先人の宝を守る
人々の想い

「神宿る島」

宗像・沖ノ島と関連遺産群

—— 守り、伝える。 ——

「神宿る島」沖ノ島

九州北部と朝鮮半島を結ぶ海、玄界灘。

その海は遙かな昔より大陸との交流の舞台となってきました。

神宿る島 沖ノ島―。

玄界灘を渡る人々は、波間に蒼然と現れる沖ノ島に

航海の安全と交流の成功を願い、祈りを捧げました。

四世紀から九世紀にかけて、祭祀の場は

岩上―岩陰―半岩陰・半露天―露天の四段階に移り変わり、

神への奉献品は供えられた当時の姿で残されてきました。

出土した八万点に及ぶ奉献品は全て国宝に指定されています。

沖ノ島への祈りを支えた古代豪族宗像氏は、

沖ノ島へ続く海を見渡す台地上に新原・奴山古墳群を築きます。

さらに、沖ノ島での祭祀は、大島と九州本土へも広がり、

沖津宮・中津宮・辺津宮という信仰の場が現れます。

祀られる神は宗像三女神。

宗像大社の三つの宮にそれぞれ、

田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神が鎮座します。

沖ノ島は、島そのものが信仰の対象です。

人の立ち入りを禁じるなどの厳格な禁忌により

今日まで守られてきました。

沖津宮遙拝所は、渡島できない沖ノ島を

遠くから拝むための信仰の場です。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、

「神宿る島」を崇拜する伝統が、

古代東アジアにおける

活発な対外交流が進んだ時期に発展し、

今日まで継承されてきたことを物語ります。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 ―守り、伝える。―
第2版 平成28年3月

発行「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
(事務局)福岡県世界遺産登録推進室

〒812-8577 福岡市博多区東公園7-7 TEL:092-643-3162

<http://www.okinoshima-heritage.jp/>

©「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

写真/乾祐綺 編集協力/一般社団法人九州のムラ

デザイン/永田修平 印刷/ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社

末社



中世の宗像地域には、通称「七十五末社」といわれるように、多数の末社が存在していた。宗像大宮司家の滅亡後、荒廃していた末社をみかねた黒田光之が辺津宮境内に勧請（かんじょう）・合祀（ごうし）し、再興整備に力を尽くした。

宗像大社は、沖津宮（沖ノ島）・中津宮・辺津宮の三宮と沖津宮遙拝所からなる、日本でも有数の歴史を持つ神社です。祭神の宗像三女神は天照大神が生んだ三柱の女神として「古事記」「日本書紀」の神話に登場します。

七世紀後半、九州本土の釣川沿いにある宗像山中腹で、沖ノ島と同様の祭祀が営まれるようになります。これが下高宮祭祀遺跡で、「辺津宮」として記紀神話に記されています。

古代の釣川は入海で、かつては辺津宮の近くまで海水が来ていました。「日本書紀」では辺津宮が「海浜」と記されており、また、中世末期の様子を表す境内絵図には、釣川が境内とその外部を区切るように描かれています。沖ノ島（沖津宮）や大島の中津宮と同じ様に、辺津宮も海と深い関係にありました。

鳥居をくぐり、参道を進むと、神門の向こうに市杵島姫神が祀られる本殿があらわれます。辺津宮では、十二世紀までに社殿が築かれたことが分かっていますが、戦乱などにより度々失われました。最後に焼失したのは弘治三年（一五五七）で、天正六年（一五七八）に大宮司宗像氏貞によって本殿が再建されました。氏貞は跡継ぎがないまま亡くなり、大宮司家は途絶えますが、天正一八年（一五九〇）に九州に転封された小早川隆景によって拝殿が再建されます。その後は、福岡藩主黒田氏によって代々修理費用が賄われ、時代が変わっても、信仰は途切れることなく現在まで続いています。

社殿の周りには、辺津宮の末社（本社に付属する小さい神社）が並んでいます。これらは延宝三年（一六七五）に第三代福岡藩主黒田光之によって、宗像郡内の末社が集められ、合わせて祀られたものです。現在もこの時に造営された末社の社殿がいくつか残っています。

氏子らの篤い信仰心

昭和12年（1937）、沖ノ島に軍の砲台建設の話が持ち上がり、氏子総代が国へ中止を求める上申書を提出した。そこには「神域を軍用に利用するならば、まずは神様のご意思を尊重しなさい」と記されている。また、氏子の一人が当時の宮司に「身を賭して沖ノ島を守れ」と電報を打ち、それに応えるように神職たちも「天裁を仰ぎ勅祭の儀を行うべし」との陳情書を上申している。その結果、建設に際しては、一木一草一石も持ち帰らないことや、むやみな伐採・採石が禁じられるなどの厳しい条件が定められ、社殿や祭祀遺跡周辺に手が加えられることは一切なかった。

氏子青年会前会長の小林正勝さんは言う。「地域の誇り、とでも言うんですかね。自分たちが守ってきたものが、世界遺産登録というカタチで集約できればいいかなと思っています」



辺津宮境内図



宗像大社 辺津宮

古から受け継がれる

宗像三女神信仰の中心地



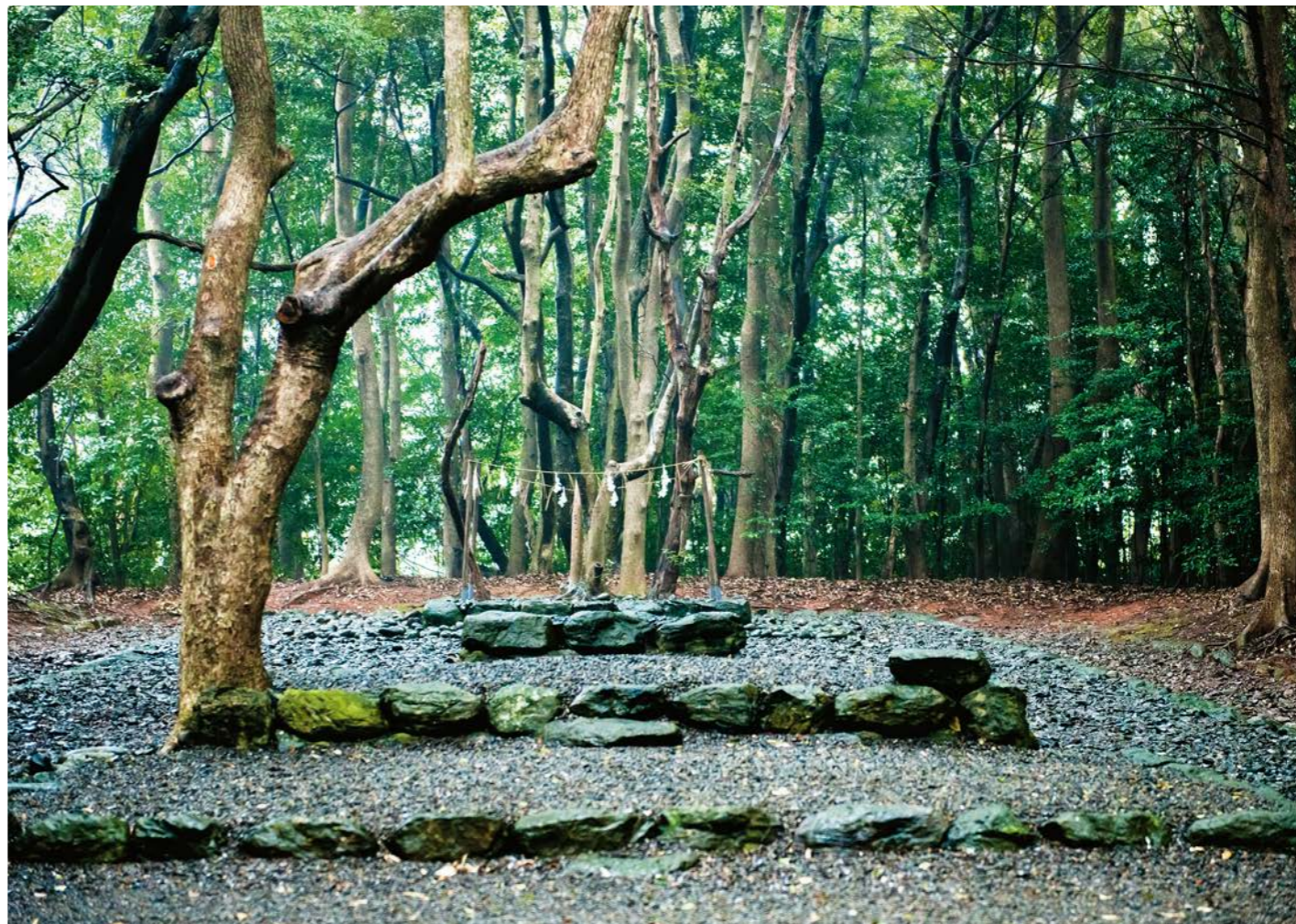
第二宮・第三宮

中世の主要な神事は、「五社」と称された辺津宮の第一宮、第二宮、第三宮、宗像市鐘崎の織幡社（おりはたしゃ）、同王丸の許斐社（このみしや）によって行われた。



神宝館

1階は沖ノ島岩上祭祀の奉獻品や中世大宮司家の対外交流の証である宋風獅子、阿弥陀経石など、2階は岩陰祭祀、半岩陰・半露天祭祀、露天祭祀の奉獻品の数々、3階は古文書や崇敬者からの奉納品などを展示する。沖ノ島祭祀遺跡の価値、宗像大社の歴史について学ぶことができる施設である。



高宮祭場

下高宮祭祀遺跡の一部が、古代のまつりの場を再現した高宮祭場として整備されている。高宮神奈備祭や毎月十五日の月次祭などの神事が行われている。

宗像大社の復興のために

戦中・戦後、荒廃した宗像大社にもう一度光を取り戻すため結成された「宗像神社復興期成会」（現 宗像大社復興期成会）。その中心人物は、物心両面の援助を惜みず、神社史の編纂、沖ノ島祭祀遺跡の学術調査、昭和の御造営など、大社の復興のために献身的な努力を重ねた。功績はあまりに大きいかかわらず、その名は境内のどこにも残されていない。名誉宮司の養父守さんが教えてくれた。

「是が非でもお名前を残させてほしいとお願いしたのですが、畏れ多いとおっしゃるばかりで」

その人物が頑として拒むので、境内のどこか、けっして人目につかない場所に名前を刻み、忍ばせたようだ。

刻まれたのは、宗像の旧赤間村出身で出光興産の創業者である「出光佐三」の名であった。

海の道むなかた館



遺産群の世界遺産としての価値と魅力を伝える海の道むなかた館では、立ち入ることのできない沖ノ島の3D映像を見ることができる。様々な体験学習やイベントも開催されている。

社殿の横の道をぬけ、背後の宗像山へ階段を昇って行くと、高宮祭場（下高宮祭祀遺跡の一部）があらわれます。下高宮祭祀遺跡は辺津宮の起源となる古代祭祀の場で、信仰上極めて重要な場所です。高宮祭場の北西からは、釣川や大島、玄界灘を見渡すことができ、海を介した沖ノ島とのつながりを物語ります。宗像大社の最も重要な神事である秋季大祭の最終日（十月三日）には、宗像三女神に大祭が無事執り行われたことを感謝して高宮祭場で神奈備祭が行われます。

高宮祭場から降りてくると、二つの社殿がみえてきます。中世の辺津宮境内には、第一宮、第二宮、第三宮という三つの主要なお宮がありました。現在の辺津宮の本殿・拝殿は、もともと第一宮の社殿でした。その本殿・拝殿の背後に位置しているのが現在の第二宮第三宮です。第二宮に沖津宮の田心姫神、第三宮に中津宮の湍津姫神が祀られています。現在の第二宮、第三宮社殿は、第六〇回式年遷宮（昭和四十八年）に際して、伊勢神宮の別宮の古殿舎が下賜されたものです。本殿・拝殿だけでなく、第二宮、第三宮にも参拝すること、宗像三女神の三柱にお参りしたことになります。

さらに進むと神宝館があります。三角縁神獸鏡や金製指輪、金銅製龍頭など八万点に及ぶ沖ノ島祭祀遺跡から出土した奉獻品（全て国宝）が收藏・展示されています。また、中世の宗像大宮司家の繁栄を伝える古文書、皇室や福岡藩主などの敬神の念をしのばせる奉納品を始めとして、宗像大社の神宝が数多く展示されています。

佐藤 信

東京大学大学院教授

「宗像・沖ノ島」が語るもの

禁忌に守られた絶海の孤島沖ノ島の巨石をめぐる古代祭祀遺跡では、アジアとの交流でもたらされた4～9世紀の古代国家の財宝が惜しげもなく神に捧げられていた。その調査により、対外交流の聖地における、自然崇拜から社殿の成立に至る祭祀の展開が跡づけられ、信仰を支えた宗像の人々の姿も明らかになった。今日でも重要な「祈りと交流」の起源と展開を物語る宗像・沖ノ島と関連遺産群は、私たちに有益な文化的示唆を与えてくれている。

西谷 正

海の道むなかた館館長
 (「宗像・沖ノ島と関連遺産群」専門家会議委員長)

私たちは生きるために、それも健康で快適な生活を送るために、身のまわりの医療・福祉・教育などの社会基盤の整備を常に行っています。しかし、それだけでは何か物足りないものを感じます。それが、豊かな自然環境や悠久の歴史遺産ではないでしょうか。それらの足跡をたどり、学ぶことは楽しかったり、夢をふくらませてくれます。信仰・交流・伝統という点で、典型的な資産が「宗像・沖ノ島と関連遺産群」ではないでしょうか。

禰宜田 佳男

文化庁文化財部記念物課
 埋蔵文化財部門主任文化財調査官

「沖ノ島と関連遺産群」の魅力は、まず何といっても、絶海の孤島沖ノ島。そこには、1600年の時が止まったままの歴史・文化・自然が残っている。さらに、大島と九州島には宗像大社の社殿も残り、それら祭祀を司った氏族である胸形氏の奥津城、新原・奴山古墳群も往時の姿をとどめている。祭場とその執行者の存在が明らかになっている例は希少で、その祭祀が現在まで継続しているという点で世界に誇る歴史的、文化的遺産だ。

金田 章裕

京都大学名誉教授

沖ノ島に残された豊かな古代遺物の存在を初めて知ったのは、岡崎敬九州大学教授が出演されたテレビ番組であった。「海の正倉院」といったテーマであったと思う。40年以上も前のことであるが、その印象は今も鮮烈である。島に渡る機会があって、襖を済ませて急坂をたどり、それを追体験することができた。宗像大社の三神の神域として一体的に保存・継承されている一帯は、新原・奴山古墳群とともに古代の人々の息遣いを今に伝えている。

サイモン・ケイナー

セインズベリー日本藝術研究所
 考古・文化遺産学センター長

海の正倉院、沖ノ島

沖ノ島は、日本と東アジア大陸を繋ぎつつも隔てる神聖な海景にたたずむ。玄界灘におぼろげに現れる孤立した山の急な側面に立つ巨岩群と原始林の周辺には祭祀のための奉斎品が残された。これらの宝は古代アジアを縦横に交差した絹の道に起源を持つものを含み、東アジアが10世紀までにまとまりのある地域として出現した際の海の交流の重要性を証明する。長く宗像三女神が宿として崇拜される沖ノ島は比類が無く、世界の聖なる島や山に匹敵し、人々のつながりのすぐれた本質を表すものとして顕著な普遍的価値がある。

任孝宰 (イム・ヒョジエ)

ソウル大学校名誉教授

福岡空港へ降下する飛行機の窓から、遠くに小さい島が目に見える。古代、国家安寧と航海安全を祈る祭祀が行われた沖ノ島。出土遺物は中国・韓国と日本の交流があったことを示している。よく似た遺跡が韓国西海岸にある竹幕洞。中国から韓国を経て日本へ向かう航路上の補給基地かつ祭祀の場である。竹幕洞と沖ノ島は、日韓両国の活発な交流を示す歴史的証拠のみならず、古代人の精神世界を表す人類の重要な文化遺産である。これらの歴史的に重要な場所を守るのは、現代を生きる私たちの義務である。

磯村 幸男

福岡県企画・地域振興部総合政策課
 世界遺産登録推進室 参与

人々は自然の中に神を見出し、信仰を産み出す。神はやがて人格神となり、神社へと繋がって行く。この過程の中で、神に対して幾多の祭祀行為が行われた。沖ノ島を中心とする資産は、この変遷の過程と当時の情景を今に伝え、追体験出来る稀有な資産である。この地域に暮らし、航海に従事し、生業に動んできた人々は、この信仰を産み出し、育て、守ってきた。その有様は、地域の景観とともに人々の生活の中に息づいている。この掛け替えのない資産を景観とともに如何に地域の誇りとして守り、継承して行くかを、地域の人々、それを支える人々とともに私どもは一緒に考えて行きたい。

寄稿 1

「神宿る島」 宗像・沖ノ島と関連遺産群へ 価値を語る

稲葉 信子

筑波大学大学院教授

宗像の海を前に、はるか先の沖ノ島を思う。海とともに生きてきた人々は、どのような願いを沖ノ島に託して大陸に渡っていったのか。隣国の興亡とともに日本の歴史が作られてきたそのあたりまえのことが、古墳の背後の丘に立つとみえてくる。ああそうかこの辺りはかつて内海、ここから船出していったのかと。日本を東アジアの歴史の中で考えることができる場所、政治と信仰が一体であった時代があったことが分かる場所、それが価値なのだと思う。

社殿



16世紀末には中津宮と御嶽神社の社殿が確認され、今日の境内に近い配置であったことがわかる。現在の本殿は17世紀前半頃に建てられたと考えられている。



御嶽山

御嶽山山頂からは、沖ノ島を望むことができる。反対側に視線を投げると、辺津宮や新原・奴山古墳群のある宗像地域一帯を望むことができ、本遺産群が海によって結ばれていることを実感できる。



中津宮境内図

社務所の横を通って天の川へ降りる道を進むと、「天の真名井」があります。記紀神話に、アマテラスがスサノヲの剣を三つに折り、「天真名井」ですすぎ、嘯み砕いて口から吹き出すと、その息吹の霧の中から宗像三女神が生まれたとあり、これに因んで名付けられました。「延命招福の霊泉」といわれ、冷たい水が一年中湧き出ています。この御神水で習字をすると書が上手くなるとの言い伝えから、多くの子供たちが訪れます。本殿の裏手からは、御嶽山の山頂へと険しい参道が続いています。沖ノ島と共通する古代祭祀が終わった後、山頂には御嶽神社、麓には中津宮の本殿・拝殿が築かれます。山頂の御嶽神社と麓の社殿はこの参道によってつながり、一体的な信仰の場を形成しています。山頂からは沖ノ島、さらに、その反対側には宗像地域全体を見渡すことができます。



宗像大社 中津宮

島の暮らしと
ともにある信仰の場

この島に鎮座する大島は宗像市神湊から十一キロメートル離れた、人口七百八人の福岡県最大の島です。中津宮は、沖津宮・辺津宮とともに宗像大社の三宮の一つです。七世紀後半、大島で最も高い御嶽山山頂でも沖ノ島と同様の祭祀が営まれます。これが御嶽山祭祀遺跡で、「中津宮」として記紀神話に記されています。大島の南側、大島港からほど近くに鳥居が海に向かって立ち、中津宮も海と深い関係があることをうかがえます。境内には「天の川」という川が流れています。天上の天の川になぞらえたこの川をはさんで、牽牛社・織女社があります。中津宮で最も盛大な神事である七夕祭は、旧暦の七月七日に近い八月七日に行われます。かつて祭りの前に牽牛社・織女社に参籠し、川の水を入れたタライに映った姿で男女の縁を定める風習があり、これは古く鎌倉時代までさかのぼるようです。鳥居をくぐり急な石段を昇ると、中津宮の社殿があらわれます。本殿は県の有形文化財に指定され、宗像三女神のうち湍津姫神が祀られています。周囲には大島島内の末社が集められ、合わせて祀られています。

呂舟 (ル・ズー)

中国イコモス副代表

沖ノ島と関連遺産群は、文化的景観としての特徴を備える遺産の構成資産によって、日本の歴史上の中国・朝鮮半島との間の海を介したつながりを示し、また、東アジアにおける各文化間の交流と伝播の過程を反映し、一つの独特な角度から日本文化の発展を記録しているものである。中津宮から沖ノ島を遥かに望むという、人と神との、人と大海との間の密接な関係は、歴史を超越して深く今日の人々の心をも揺さぶることだろう。このように依然として生命力を保持している独特な文化が残されているものとして、突出した世界的な価値（OUV＝顕著な普遍的価値）をもっていることに疑いはない。

王 巍 (ワン・ウェイ)

中国社会科学院考古研究所所長

沖ノ島は非常に貴重かつ特別な文化遺産です。神秘的かつ荘厳であることは、さながら海上に輝く宝石のようで、人は肅然として襟を正し、色々な思いを頭に巡らせませす。人々が海上交通の平穏への願いを託した沖ノ島は、古代日本と東アジアの重要な隣国である中国隋唐王朝との交流の歴史を証明しています。東アジアの諸隣国との交流の中で他国の政治や経済・文化を積極的に学び、取り入れた古代の日本は、迅速な発展を成し遂げて東アジアの政治舞台の重要な一員となったのです。一日も早い沖ノ島の世界文化遺産登録の実現をお祈りしています。

松浦 晃一郎

前ユネスコ事務局長

2012年9月に世界遺産の候補となっている宗像・沖ノ島の一連の構成資産を訪問する機会に恵まれた。これらの構成資産はユネスコの世界遺産条約で言う「顕著な普遍的価値」を持っていると確信した。中でも4世紀後半から500年に互って、日本と中国の間の交流を進めるための信仰の中核をなした沖ノ島に大変感激した。航海の安全を願うために使われた銅鏡等約8万点の出土品が当時のままの形で島に20世紀まで残っていたということは驚異的なことである。

三輪 嘉六

九州国立博物館長

宗像・沖ノ島の世界遺産登録は、地域に明るい未来と新しい希望をもたらすと思っております。何しろ、この一大遺産は古くから海と共にあった神聖な祭祀文化として、皆さんの誇りの象徴となってきたものです。また最大の海上祭事である「みあれ祭」は、古代神事の今日的表現でもあります。世界遺産への登録は、こうした遺産を引き継ぎ護ってきた地域の皆さんに向けての感謝であり、同時にこれを基盤とした新鮮な地域づくりへの大きな歩みとなるものといえましょう。

岡田 保良

国士館大学
イラク古代文化研究所教授

何をもって世界遺産たりうるか。富士山を引き合いに出すまでもない。世界遺産はまず、人の心を動かすものでなければならぬ。そこに言葉がなくとも、である。その感動は何故だろう、と考えたとき、理屈が出てくる。感動は容易に国境を越えるが、理屈はなかなかそうもいかない。それをこの業界は「顕著な普遍的価値」とよぶ。大海に浮かぶ孤島という自然を介して結ばれる人と神との関係性。沖ノ島の理屈を私はそこに求めたい。

C・W・ニコル

作家・ナチュラリスト

あらゆるものに神々が宿るとする神道の価値観は、日本のみならずかつては海外でも当たり前であったものです。宗像大社には絶海の孤島、沖ノ島という稀有な島があり、常に荒れ狂う玄界灘に鎮まる宗像の神々は、時には人々に恵みを与えつつも近寄りたがいない存在でもあります。人類は文明という名のもとに自然を軽視し、その結果、様々な問題を抱えることとなりましたが、自然を畏れ敬いながら、今もそこに神々を祀り続けている姿は、世界の人々にとってもきっと大きな示唆を与えてくれることとなるでしょう。

寄稿2

世界遺産として

「神宿る島」
宗像・沖ノ島と関連遺産群へ

ガミニ・ウイジェスリヤ

文化財保存修復研究国際センター
プロジェクトマネージャー

沖ノ島と、島々に帰する神聖さ、古代の祭祀形態とその変遷を今日に示す豊富な考古学的証拠、現存する神社、そして祭祀を司った古代の住民の存在を表す古墳群といった沖ノ島に関連する文化的な発現は、世界のある文化的地域において国際的な交流や航海の発達に応じてきた社会を真に現すものである。これらへの対応は世界の多くの社会に共通する現象であり、この遺産をより深く理解することで、日本という地理的な位置を超えた重要性が見えてくる。

大島の鳥居

大島のあちこちで見かける鳥居がある。笠木の先がクイっと少し上がっているのが特徴で、なんとも芸術的な感がある。この鳥居の形状は宗像大社の「平成ノ大造営」のマークにもなっているので伝統のものと思われがちだが、意外にも一人の氏子で作ったものだ。手がけたのは漁師であり、大島氏子奉賛会元会長の古賀理さん。鳥居は、島の先輩たちが作ったものを真似たのだという。島の氏子たちはそうやって代々神様にご奉仕してきた。だが、古賀さんが鳥居を作る理由は他にもあった。

「もう2度も命ば救ってもらおうとけんですね」

なんでも潜って漁をしていたときに命を失いかけたことがあるとか。だから神様に何か恩返ししたいと思い、鳥居の奉納を始めたそうだ。

古賀さんと話すと、神恩感謝の心こそが美の原点なのかもしれないと感じられる。

“不言様”への思い

「“沖ノ島仲間” て言うて。自分が最年長ですもんね」

そう教えてくれたのは、ベテランの漁師、上野美實さん。漁や操船の技量はもちろん、人柄などを他の漁師たちから認められた者でなければ、沖ノ島仲間の資格は得られない。

沖ノ島仲間はシケで漁ができないときは沖ノ島の清掃をするという。捕った魚は神様へ献上し、日々の感謝も欠かさない。島のものを持ち帰るなどはもってのほか。海に浮かんだ松の枝でさえ、取るのをためらう。

「したらイカンで言われることをしたら“不言様”の祟りとかバチが当たるて、子ども時からよう聞かされよったですもん」

沖ノ島仲間の漁師たちは、沖ノ島の海を“神様の海”だと思っている。自分たちはその神聖な領域で恵みを授かっているのだと、彼らは理屈ぬきに信じているのだ。

沖津宮遙拝所の中から沖ノ島を望む。人々は禁忌を守り、立ち入ってはならない沖ノ島に対しここから掌を合わせる。



中津宮から御嶽山山頂へと続く参道の登り口にある鳥居。漁師によって作られ、奉納されている。沖ノ島の鳥居も漁協によって奉納されている。沖ノ島は漁師たちの信仰と協力によって、今日まで手つかずのまま守られてきた。

沖ノ島は、島そのものがご神体であり、信仰の対象です。一般の立ち入りは禁止され、沖ノ島で見聞きしたことを口外してはならない(“不言様”)、全裸になり海中で穢れを祓う(“禊”)、島から一木一草一石たりとも持ち出しはならない、などの厳格な禁忌によって島は今日まで守られてきました。

渡島できない沖ノ島を遥拝(遙か遠くから拝むこと)するため、大島の北側の海辺に沖津宮遙拝所が設けられました。遙拝所は、沖ノ島をご神体として拝む拝殿の役割を果たしています。沖ノ島の禁忌や遥拝の伝統は現在も受け継がれているのです。

よく晴れて空気の澄みきった日に訪れると、水平線上に浮かぶ沖ノ島をはっきりと望むことができます。

宗像大社

沖津宮遙拝所

沖ノ島に最も近づける場所



辻野 晃一郎

アレックス株式会社代表取締役社長
(元グーグル日本法人代表取締役社長)

父の出身が江口、母の実家が出光なので宗像大社には幼い頃よく両親に連れて行かれた。22年勤めたソニーを辞めた時、何故か宗像大社に行かねばならない気がして参拝した。「古きを捨てて新しきにつくがよい 元気を出して捨てるべきは捨てる進む所へ進め」とおみくじに書いてあってまさに御神託を得た思いがした。その後、グーグルとの出会いを経て、現在の起業に繋がるきっかけともなった。宗像の地は私にとってのルーツであると同時に行動のエネルギー源でもあるのだ。

前川 泰之

俳優

今でもあの、荒波と碧い空の合間に現れた沖ノ島の、日の光に輝く神々しい姿は目に焼き付いて離れません。そして何よりも宗像三女神を畏敬の念だけでなく、親しみと愛情を持って接し守っている宗像の人々の姿がとても印象に残っています。こうした宗像の風土は、沖ノ島という稀有な存在はもちろん、関連する多くの遺跡群と共に、より多くの人に知って頂きたいですし、後世に残し伝えていくべき日本の原風景なのだと思っています。

森口 博子

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」
世界遺産応援大使・歌手

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産応援大使のお話を頂いた時は、本当に驚きました。私の地元福岡県に、母のふるさと宗像に、太古のロマン溢れる神々しい島が存在していたなんて！ 女人禁制なもの増々惹かれます。3Dで体感しましたが、凜とした空気感に魂が浄化された様でした。世界遺産への想い…自然の神秘的な美しさ、文化遺産の輝き、歴史が生まれ生命が繋がれている事への象徴であり、感謝であり、そして継続だと改めて感じました。

澁澤 寿一

認定NPO法人
共存の森ネットワーク 理事長

海の正倉院、沖ノ島

持続可能な社会への転換が急務な現代、人と自然、人と人、人と神、世代と世代の関係は限りなく希薄になっている。この無縁社会は他者への無関心・無視へとつながり、地域の自然、神々への無視は、自己中心的な社会をつくりだした。宇宙船地球号の一員である人類が未来への道筋を探るとき、沖ノ島の多様性とバランス、そこからつながる神々と人、自然が溶け込んだ姿は、あるべき未来への遺産と言えよう。

進士 五十八

東京農業大学名誉教授、
日本学術会議環境学委員会前委員長、
政府の自然再生専門家会議委員長

宗像から始めよう 世界の社叢環境学

古来、社叢は日本人の心の拠りどころであった。その土地独自の原植生が持続し、絶えざる祭祀が人々のくらしの安全安心を叶え、幾百年の文化が育んだふるさと風景がいまも眼前に広がることの意義がいかに大きいか、昨今の気候変動の激しさや生き物多様性の減退スピードをあわせ考えるとすぐわかる。これからは日本列島の緑が地球の社叢になり、世界の人々の拠りどころとなるべく、私たちは新しい総合環境学・社叢環境学を「宗像」から始めたい。

禹在柄 (ウ・ジェビョン)

忠南大学校人文大学考古学科教授

思い浮かぶ景色があります。宗像市、福津市の海が一望できる白い海岸線であります。この美しい海辺に広がる水田の緑色は私の記憶の彼方で今も輝いています。羊腸たる小道を走る少女達の自転車列、この少女達を見守る古代遺産は一幅の水彩画のような光景であります。沖ノ島の伝説を秘めたこの町の自然、古代遺産、人々と再会したいです。1500年前、母なる玄界灘を渡る古代船からこの町の美しい海岸線を眺めた人々にも会いたいです。彼らにこの自然と古代遺産の保全について質問したいです。《古代と現代をつなぐこの町の古代遺産が日本を代表する世界遺産になってほしいです》という答えはこだまのように響くでしょう。私は宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界遺産になる日にその喜びを分かち合いたいです。

北 康利

作家

日本人にかえれ！—これは出光佐三翁の有名な言葉だが、この国の人間が最も大切にしないといけないものは日本人らしさだと翁は喝破されたのである。自然の脅威に対する敬虔な気持ち、神や父祖に対する畏敬の念や感謝の心。それらは日本人に謙虚さを与え、忍耐力を与え、生き残る力を与えてくれた。今、宗像の地とともに、日本人の原点を見つめ直し、その素晴らしさを世界に向けて発信する時ではないだろうか。

寄稿3

「神宿る島」 宗像・沖ノ島と関連遺産群へ 遺産群への想い

伊藤 英明

俳優

玄界灘の荒波の中に悠然と佇む沖ノ島。生まれたままの姿になり海中で裸ぎを行い上陸しました。島の中腹にある沖津宮までの参道沿いには植物が生い茂り太古の姿のままの豊かな自然が残されています。島の中腹に壁のような巨石に包み込まれるように鎮座しているお宮。神々への畏敬の念を人々が抱き続けた理由をこの清浄な神域が全てを物語っていました。荒波の玄界灘に浮かぶ沖ノ島はまさに神秘の島、神々しい自然の中に神々の存在を確かに感じる島でした。

古墳のある風景を後世に

古墳群とその周辺の風景が良好に残されてきた理由は2つある。

1つは噂。地元で“塚”と呼ばれる古墳群には、「塚に近づいて1か月も高熱が続いた人がいた」「塚風にあたると病気になる」等々。これらは、得体のしれないものへの畏怖とともに、先人らが大切に守ってきた聖域を侵してはならないという警告ともとれる。

もう1つの理由が、地域の方々の努力だ。奴山地区に暮らす人々は塚のある風景を愛してやまない。あの山の上からの眺めがいいとか、夕日が沈むときが一番きれいだとか、それぞれが自分だけのおすすめの“塚の風景”を持っている。

むなかた乗馬クラブの増田美佐子さんは、福岡と津屋崎の観光名所を馬車で巡る「つやざき観光馬車」を企画した。

「馬車ののんびりしたリズムと古墳の風景がものすごくマッチするんですよ」

それもまた後世に残したい塚の風景になりそうだ。



新原・奴山古墳群案内図

22号墳



30号墳



百塔板碑

左／全長80mの前方後円墳。5世紀に築造され、新原・奴山古墳群の中でも最も古い時期の古墳である。周囲には幅10m程の周溝が巡っている。

右／6世紀に築造された全長54mの前方後円墳。全体として保存状態が良く、前方後円墳のかたちをよく見ることができる。

下／5世紀につくられた21号墳の上には石に梵字や仏像が刻まれた8基の石碑（新原の百塔板碑）が建つ。北条時頼が諸国行脚した際に平家一門を弔うために建てた、あるいは、蒙古襲来の戦死者の供養のために建てられたという伝説があるが、行円という僧がこの地域の人々の協力を得て、それまであった墓石や供養塔を改修し建てたものと伝えられる。

新原・奴山古墳群

沖ノ島祭祀を行った 宗像氏の墳墓群

福津市にある新原・奴山古墳群は、海を越えた交流の担い手として沖ノ島祭祀を行い、信仰の伝統を育んだ古代豪族宗像氏の墳墓群です。

宗像氏は、五〜六世紀にかけて、入海に面し沖ノ島へと続く海を一望する台地上に墳墓群を築きました。前方後円墳五基、円墳三五基、方墳一基の計四一基が現存しています。大型の前方後円墳（二二号墳）や中型の前方後円墳（二一號墳）は五世紀、中型の前方後円墳（二二・二四・三〇号墳）は六世紀前半〜中頃、小型の円墳群（三四〜四三号墳）は六世紀後半に築かれました。また、入海に突き出た位置に五世紀に築かれた七号墳は、宗像地域では珍しい方墳で、沖ノ島祭祀と共通する鉄斧が発見されました。これらは良好な状態で現在まで伝えられてきま

した。前方後円墳のかたちや墳丘の周囲をめぐる溝などもかつての姿を留めており、散策しながら古墳群を楽しむことができます。

古墳群の台地上からは、海を挟んで大島や沖ノ島へと続く海を一望できます。この新原・奴山古墳群の前面には、かつて入海が大きく広がっていました。近世初頭に入海が干拓されて塩田が開かれるまで、勝浦から渡半島にかけての砂州は「海中道」と呼ばれていました。入海の広がる宗像地域とその海を支配した宗像氏は、沖ノ島祭祀を営み、やがて宗像三女神を祀るようになりました。沖ノ島へと続く海に面した新原・奴山古墳群は、沖ノ島祭祀を奉斎した宗像氏の存在を物語る物証です。



永島 淑子

年毛神社・縫殿神社宮司

ぬやまぬいどの えひめ みこと ぬいひめ
 奴山縫殿宮の御祭神は兄媛の命（縫工女）で、この地に古墳があります。胸形（宗像）の大神は兄媛に神服を織らせ、御衣を縫わせられました。呉王より賜わりし工女で日本最初の呉（和）服の神様です。宗像海人族は勝浦の入江を拠点にし、年毛の台地对岸一帯に、「海北道中」を支配した胸形（宗像）の君の一族の跡と言われる古墳が点在しています。古墳群は北の勝浦に始まり新原・奴山古墳群41基、神気溢れる壮観な眺望を来訪なさる皆様と共に海の民の祈りと文化交流の一端を感じます。

本田 悦子

大島地区コミュニティ運営協議会
 事務局長

大島は今、島の基幹産業でもある漁業がここ数年の漁獲量減少の影響を受け、活気がなくなりつつあるのは事実。けれど漁業のほかにも、玄界灘に囲まれた豊かな自然環境などこの島には良いところがたくさんあります。先代たちが苦勞して築きあげてきたしっかりとした基盤があるので、島にはまだまだいろんな可能性があると思っています。世界遺産登録に向けて注目されている今がチャンス。新しいアイデアを積極的に取り入れながら島を活性化していきたいと、島民の一人として思っています。

田島 信之

神湊三自治会連合会会長

世界遺産という言葉にいちばん戸惑いを感じているのは、地元住民なのかもしれません。自分たちが生まれ育った地域が学術的に価値あるもので、世界中の名だたる世界遺産に匹敵するほどのものだとは思いませんでした。ですから無理もないことです。けれど、だからこそ気づいて欲しい。自分たちの住む地域が、それだけ素晴らしいものだということに。当たり前すぎて知る機会のなかった地域の歴史に今一度目を向けて、自分たちの地域を誇らしいと感じて欲しいと思います。

平松 秋子

むなかた歴史を学ぼう会会長

宗像は、古事記や日本書紀にも登場する歴史のある土地柄でもあり、それが私たち市民にとって誇りでもあります。宗像地域の至る所にある文化財や神社は、その歴史を語る上でとても重要なもの。これらを次世代に残すためにも、大切に守っていかなくてはなりません。弊会では宗像の歴史を学びながら、文化財の保護活動にも力を入れて参りました。これからも講演会や親子の体験型学習会などを通して、一人でも多くみなさまに宗像の歴史を伝えていきたいと思っています。

うえやま とち

マンガ家

福津に住んで、ちょうど20年になります。海に山に近く、けしきは美しく、美味しい食材にあふれています。特に、国道495号線沿いの「新原・奴山古墳群」あたりから、勝浦あたりのけしきはすばらしく、広々とした田園に、季節によっては菜の花やコスモスが咲き乱れ、その向こうに青い海がきらめく！ボクは勝手に「日本で一番気持ちのよい道路」と名付け、クッキングパパにも描いています（93巻）。この道路を走るたび、いいね〜と幸せを感じてますですバイ!!

高向 正秀

宗像大社宮司

宗像大社は日本神話に登場する神々を祀る古い神社であり、特に沖ノ島（沖津宮）では国家の安泰を祈った複数の巨岩（磐座齋場）が現存する。全国には約八万の神社があるが、今日では社殿のない神道本来の磐座齋場を有するのは沖ノ島以外には殆ど見当たらない。そういう意味では、沖ノ島は日本固有の民族宗教である神道においても極めて貴重である上に、我々は今も連続と続くこの沖ノ島の歴史と伝統文化を子々孫々と護り伝えていく責務がある。

寄稿4

地域とともに 「神宿る島」 宗像・沖ノ島と関連遺産群へ

石井 忠

福津市文化財保護審議会委員

神と人と墓

天気のよい日、玄界灘を望む山や島から、幽かに神宿る沖ノ島が望見できる。その海岸にそって前方後円墳十六基を含む六十一基の津屋崎古墳群が連なり壮観である。ここは沖ノ島を奉斎し、大陸・朝鮮半島へ海を舞台に生きた胸形海人の奥津城である。墳丘に立つと、古代への想いが沸々と湧いてくる。神宿る沖ノ島は古代人が敬い祈った聖域であり、今も神と人と墓が一体となって続いているところは世界でも類を見ない。

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群

公開・活用の考え方

沖ノ島を敬い、守り伝えてきた遺産群の価値を
守り、高め、広く、長く伝えていく

二 円滑な来訪

遺産群の価値への理解は、大島や九州本土の各遺産や展示施設を訪れることで深まります。見学に来られる方が円滑に周遊できる環境を整えます。

四 地域との協調

遺産群の公開・活用には、宗像地域にお住まいの方をはじめとする多くの方々の理解と協力がが必要です。見学者と地域住民、それぞれにとって好ましい環境を整えます。

一 遺産群の保護

世界遺産の最大の目的は、人類共通の宝として遺産を将来に伝えることです。そのため遺産群の価値を損なわないよう、充分な保護を前提として公開・活用を行います。

三 価値の探求・発信

遺産群にはまだ明らかになっていないことも残されています。価値の探求・発信を継続し、それらを広く、長く共有していきます。

地域の宝を

守り、伝えるために

理念

遺産群と伝統を守る

沖ノ島の神秘性や遺産群の価値を長年守ってきた地域の伝統を、損なうことなく次世代に伝えます。

価値を継続的に高める

調査・研究、情報発信を継続して遺産群の価値の向上や保全を図り、分かりやすく伝えます。

地域の一体感を育む

沖ノ島、大島、本土にまたがる遺産群を守り伝えることを通じて、地域としての一体感を育みます。

世界と交流する

アジアをはじめとする、遺産群とつながりのある諸地域との交流を促進します。

